

一 京都時代

草庵は幼い時両親を亡くし、満福寺に入っていた。しかし、満十七歳で寺をぬけ出て、京都の相馬塾で学んだ。二十三歳で、京都西の梅宮に粗末な家を借りて、世俗から離れて儒学の古典を読み、修養を積みながら独りで学んでいた。さらに、二十四歳からは京都松尾山（西山）に移り住み、自分の学問の確立をめざした。

西山幽居

西山自古多隱士
今亡其人有其廬
吾留西山已三歲
便知西山宜幽居
翠松緑竹長如此
清風明月適清虚
嗚呼
吾居路遠人不
到終日坐讀古
人書

西山幽居

西山古より隱士多し
今其の人亡くして其の廬有り
吾西山に留まること已に三歲
便ち知る西山幽居に宜しきを
翠松緑竹長へに此の如く
清風明月適に清虚
嗚呼、
吾が居路遠くして人到らず
終日坐して古人の書を読む

西山Ⅱ京都の西側に連なる山々 幽居Ⅱユウキョ 世間から離れて暮らす住まい
隠士Ⅱインシ 隠者 廬Ⅱイオリ 小さな粗末な家 草庵 適Ⅱテキ マサニ

【訳】

西山幽居

西山には昔から世俗を離れて暮らしている人が多い

今はその人達は亡くなりその小さな住まいだけがある

私がここに来てからもう三年にもなる

ここが世間から離れて住むのにはとても良いところだとわかってきた

緑の松や竹は、昔からずっとこのようであった

気持ちよい風が吹き月がでてまさにすがすがしいところだ

ああ 私の住まいは人の多い道からは遠く人は来ない

終日静かに座って昔の人の書物を読む

余在西山

某生自某州来就予學

愛汝千里求師友
却向山中相追隨
山中吾住三四歲
清幽眞勝紫陌陲
紫陌紅塵人易汚
山中終日松風吹
授汝文字只一卷
讀取莫怪得意遲
古道由來微難見
夜伴寒燈苦尋思
聞說
俗間有書積充棟
山客平生都不知

余西山在り

某生某州より来たりて余に就いて學ぶ

汝を愛す千里師友を求むるを
却つて山中に向いて相追隨す
山中に吾住すること三四歳
清幽眞に勝る紫陌の陲
紫陌紅塵人汚れ易く
山中終日松風吹く
汝に文字を授くるに只一卷
読取怪しむ莫れ意を得ること遅きを
古道由來微にして見難し
夜寒燈に伴つて苦に尋思す
聞説らく
俗間に書有り積んで棟に充つと
山客平生都べて知らず

紫陌Ⅱシハク 都の道路 清幽Ⅱセイユウ 俗世間を離れ、清らかで静かなこと

陞Ⅱホトリ ほとり さかい 辺境の地 紅塵Ⅱコウジン 町の道路にたつちり
ぼこり この世のわずらわしい事がら 由来Ⅱユライ もともと 苦Ⅱク しき
りにはなはだ 尋思Ⅱジンシ 思いをめぐらす 聞説Ⅱキンナラク 聞くとこ
ろによれば 山客Ⅱサンカク 山に住む人 来た人

【訳】

私は西山にいた

某州の某生が来て私のところで学んだ

遠いところから師を求めてきた君を愛す

かつて山中において共に過ごした

私が山中に住んで三、四年たったころだ

清らかなこの地は都会よりも勝れている

都会の汚れは人を汚させやすい

山中は終日松風が吹く

君に文章を教えるのはただ一卷

読み取ることが遅いことを心配しなくていい

昔の聖賢の道はもとも小さくて見つけにくいものだ

夜小さな灯でしきりに思いをめぐらすのだ

聞くところによると

世間では書物を家の中にいっぱい積んでいる人があるそうだ

山に住むものはそんなことは何も知らないでいい

※木南卓一著『草庵先生』によると、この某生は故郷から草庵のもとに学びにやつて来た姪の池田盛之助の事として説明されている。

同源子賛遊嵐峽

昼夜讀書不自休

源子賛とともに嵐峽に遊ぶ

苦心終古抱吾憂

昼夜書を読みて自ら休まず

今朝姑被友人誘

苦心終古吾が憂いを抱く

嵐峽更觀秋水流

今朝姑く友人に誘われ
嵐峽更に観る秋水の流るるを

源子賛Ⅱ春日潜庵　終古Ⅱシュウコ　いつも　姑Ⅱシバラク
更Ⅱサラニ　あらためて

【訳】

源子賛（春日潜庵）と嵐山に遊ぶ

終日休むことなく学問をしている
苦しみがありいつも気は晴れない
今朝は久しぶりに友人に誘われ
嵐山で秋の水が流れるのを改めて観た

※西山での交友は、春日潜庵だけであつた。春日潜庵は、草庵に資金の工面をした
り、本を貸したり、嵐山に誘つて励ましたりしていた。

冬日偶成

可愛_レ嗽々冬日光

冬日偶成

愛すべきかな嗽々_{とんとん}として冬の日の光

寒梅發處好移床
雖然門外人過去
不識吾園早有香

梅の香りのするところに床しょうを移す
しかれども門外を人過ぎ去りと雖ども
識らず我が園に早香り有るを

偶成＝たまたまできる
床＝シヨウ 椅子

噉＝トン 丸い朝日

寒梅＝寒中に咲いている梅

【訳】

冬の日の詩

すばらしいなあ まん丸な冬の朝日が昇ってくるのは
冬の梅の香りのするところに床いすを移す
しかし門の外を通る人はあつても
私の庭に梅の香りがしていることに気づく人はない

得家書有懷

行使遙傳故國音

家書かしよを得て懷うことあり

行使遙かに伝う故國の音

読来読去独沈吟
人生久作他郷客
始信弟兄恩意深

読み来たり読み去つて独り沈吟ちんぎんす
人生久しく他郷の客と作り
始めて信ず弟兄の恩意深きを

家書Ⅱカシヨ 家族からの手紙 行使Ⅱコウシ 官名 つかい
音Ⅱオト ネ しらせ 沈吟Ⅱチンギン 思いに沈む

【訳】

家からの手紙が来て思うことあり

使いの者が遙かふるさとのことを伝えてきた

一心に読んでいるとひとり思いに沈んでしまう

ふるさと離れてもう長くここに住んでいる

兄や弟の自分への慈しみの気持ちが深いことをはじめて確信した

※京都西山で故郷を離れて学問に打ち込んでいる時にも、家族からは何度もあたたかい手紙が届いた。

戊戌歳暮感懷

ぼじゅつさいぼ
戊戌歳暮の感懷

光陰石火非虚語

光陰石火虚語にあらず

二十六年夢裏移

二十六年夢の裏に移る

結髮尋師今壮大

結髮して師を尋ね 今壮大

悠々講習竟何為

悠々講習して竟に何をか為さん

感懷||カンカイ 心にいだいている思い 結髮||ケツパツ 髪を結う 元服

壮大||ソウダイ 大きく立派 元氣盛り 竟||ツイニ

【訳】

戊辰（天保九年）歳の暮れに思うこと

光陰石火とは嘘の言葉ではなかった

二十六年間は夢のうちに過ぎていった

髪を結い師を尋ね来て今は元氣いっぱいだ

長く学問をして何事かをなそう

※天保九年は、草庵は数えで二十六歳の詩。この時の気持ちのように努めていた。
数年後ふるさとで、日記『山窓功課』を書き始めるが、その冒頭にこの詩を引用し、
日々を大切に生きようと誓っている。

庚子仲秋出山作

庚子こうし仲秋山を出づる作

堅座六年松尾山

堅座六年松尾山

偶然今日向人間

偶然今日人間じんかんに向かう

身如流水随縁動

身は流水の如く縁に随ともつて動き

心與孤雲至処閑

心は孤雲と與ともに至る処閑かんなり

仲秋Ⅱチュウシュウ 陰暦で秋のまん中で八月のこと

【訳】

庚子こうし（天保十一年）秋（八月）山を下りる時の作

松尾の山で六年間修行した

いよいよ山から出て世間に入ることにした

身は流れる水の如くめぐり合わせによつて動くだろう
心は離れ雲のようにあり何時も静かであるだろう

※二十八歳の秋住みなれた松尾山を離れ京都一条に出た。

冬夜偶作

冬夜偶作

寥々犬吠兩三聲
擊柝方知夜四更
十萬人家睡夢裏
推窓獨見月輪明

寥々りようりよう犬けきたく吠う兩り三さ聲せい
擊げきたく柝ま方ま知さ夜こ四う更こう
十萬の人家睡夢すいむうの裏
窓をおして独り見る月輪の明きらかなるを

寥々りようりよう犬吠う兩三聲せい
犬が吠えること 柝まタク たたく 参考・柝擊ま拍子木をたたく

【訳】

冬の夜に作る

ひっそりとした中で犬の吠える声が二声三声

拍子木の音がして真夜中の二時ごろであることがわかる
町中の家は夢路のうちにあるのだろう
窓をあけて独り明るい丸い月を仰いでいる